Bìluóchūn

佐　藤　普美子
（中国語）

ある日、私に届いたメールのアドレスは「biluochun」――記憶にないものだったため、一瞬戸惑いましたが、それは児島先生が所用で地方におられた時、変則的に携帯電話から送ってこられたメールでした。内容はオープンキャンパスに関する急ぎの連絡で、文面の最後はいつも通り「先生にはくれぐれもご自愛ください。児島弘一郎頓首」と丁寧に結ばれていました。

Bìluóchūn――「碧螺春」。江蘇省にある太湖の洞庭山、碧蘿峰原産の緑茶の名。芳醇な香りと味をもつ上等な名茶で、その音の綴りをアドレスにされた児島先生のお人柄が、碧螺春の香りさながら、清々しく立ち昇ってくるように感じられたことを覚えています。

江南の水郷を代表する太湖といえば、古来隠者と関わりが深く、世俗的欲望や執着を断ちきった隠者が、悠々自適の境地で暮らした場所として知られています。そういえば、児島先生は太湖から産出される太湖石という変わった形の石もお好きで、他にもいろいろな珍しい石を集めていらっしゃいました。石のお話をされる時はいつでも、えも言われぬ嬉しそうな、晴々とした表情をされるのが印象的でした。

このように児島先生にはどこか中国文人の、あるいは世俗的欲望から自由な隠者の風貌がありました。しかし、隠者と違って、先生は人の世（塵世）を避けるのではなく、しっかり人の世に身を置き、誰よりも世事に心を砕かれ、小さなひとつひとつのことを決していい加減にしない実直な「行動」の方でした。いつも一生懸命で、でも私たちをほっとさせてくださる落ち着いた物腰。名利や権勢を求めず、どこまでも清らかに澄んだものを求める心――それは学生たちにも、私たち仲間にも、先生独特の静かさを湛えた品性として伝わってくる

ものでした。「児島先生といると癒される」というのはある学生の言葉です。

児島先生が逝かれてから 4 カ月余り。あの日から、私の目に映るキャンパスの風景はすっかり変容してしまいました。当然いるべき人がそこにいないというのは、なじんだ風景をこんなにもいびつに、また味気なく変えてしまうものなのでしょうか。

ビ―ルオチュン――児島先生が天上で名茶を味わいながらも、時折心配そうに地上の私たちを見守ってくださるように感じています。そしてこれからもずっとそうでありますようにと願ってやみません。（2010 年 10 月）